

# 書籍を買い尽くした遣唐使

## —遣唐留学生の人間模様—

理工学部教授 宗 像 恵

「ひどい雨で帆に穴があいてしまい、暴雨で舵は折れてしまった。高波は天にとどかんばかり、船はきりきり舞いをする。波のまにまに船はあがりさがりし、風にまかせて船は南へ北へと流される。6月はじめに出帆し、福州にたどり着くまでに2ヶ月あまり、飲み水はなくなり、人は疲れきり、海路は長く、陸地は遠い。」この名文は16次遣唐使として唐に渡った空海が大使藤原葛野麿に代わって書いた書簡の一部である。このとき溺れ死んだ遣唐使は数えきれないという惨憺たるありさまであった。

犬上三田相らの第1次遣唐使(630年)から数えると送唐客使までもふくめて前後18回(このうち中止が3回)、894年に終わっている。その期間はおよそ260年、奈良時代から平安時代にかけて日本の政治や文化におよぼした唐の影響はまことに大きかった。それだけに日本古代史における遣唐使の役割は大きく重い。しかし、遣唐使の往還には海という自然の障壁にさえぎられていたがため苦難と波瀾に満ちていた。

遣唐留学生などを始めとする日本の歴史における留学生が織りなす人間模様には極めて興味深いものがある。ここでは遣唐留学生について、①留学生の何%くらいの人が無事に帰国したのか、②著しく進んだ唐の文化をどのような方法で勉強したのか、③語学・生活習慣の障害をどのように克服したのか、④帰国してどのような活躍をしたか、最後に⑤膨大な留学費用はどのようにしたのかに焦点をあてながら述べてみたい。

第2次遣唐使のうち高田道根麻呂らの一団は薩摩半島の南の竹島で船が沈み、5名を残して150人が死没するという事故に見舞われている。生き残った5人について「日本書紀」は次のように記している。「5人の中に、門部金、竹を筏につくりて、神嶋に泊まり。此の5人、6日6夜を経て、全ら食飲ず」また最後の遣唐使となった承和の第17次遣唐使は一度目の渡海で遭難して百十数名の犠牲者を生み、唐よりの帰途、遣唐第二船の「南海の賊地」への漂流による百数十名の死没者を数えるなどあいつぐ悲惨に見舞われた。人命の損失だけを見ても、当初の遣唐使総人員六百数十名のうち400名を超える生命が、海中の藻屑となるという悲劇を、遣唐使の歴史の中に刻み込んでいるのである。

遣唐使の一行は平常食べられない糲に生水という粗食で飢を凌ぎ、風雨を冒し、激浪を乗り越え、早くて30日、ときには数ヶ月にも上る長い航海を続けなければならなかったのである。こうした悪条件のため船中で痾病患者を多く出し船を進めるのも思うようにいかなかった。17次遣唐使では水手・射手60余人が病臥に苦しんでいる。さらにまた翌年帰船の途についたとき、山東半島沿岸を航行しておったところ、水手の1人が重病となり、危篤状態に陥った。そこで未だ息を引きとらないうちに、その体を包んで端舟に乗せて岸に上陸し、山辺に捨てた。捨てに行き帰ってきたものがいうには、岸に着くと病人は未だ息があり、飲水を求めて苦しい息づかいをしていたという。こうして東支那海の荒浪を乗

り越え、盛唐文化の輸入につとめ、天平文化の創造や平安京文化の発展に大きな役割を果たした遣唐使の華やかな活動の蔭には、異国の浜辺に病軀を打棄てられ独り寂しく死んでいった犠牲者もあったのである。まさに危険な渡海という生命を賭したものだ。

遣唐使の使命は唐の先進文化を輸入することであった。それとともに唐朝に集まる各国使臣の中であってわが国の国際的地位を高めることも忘れてはならない任務であった。したがって遣唐使の選任に当たってもこの点に重点がおかれているのである。まず文化を輸入する衝に当るためにも、また他国の外交官たちと比較して、わが国の国際信用を勝ち得るためにも高い教養と人格とが必要である。したがって遣唐使の銓衡に当たって特に学者ないしは学問的素養のある人を選ぶ傾向が強かったようだ。さらに注目すべきことは容貌・風采・態度などを銓衡の条件にしているらしく思われることである。たとえば粟田真人（7次執節使）は「容止温雅」であったこと、石上宅嗣（12次副使）が「姿儀あり」であったこと、藤原常嗣（17次大使）が「威儀すぐれていた」こと、菅原善主（18次大使）が「容儀美しかった」ことなどそれである。

遣唐使の数は初期は平均で110人、中期530人、末期は599人内外である。無論以上の人数は大使以下、外交官、留学生団、技術班、船員団にいたるまでこめた総数である。この中で留学生の数は毎次十数名、多くても二十数名であった。今日文献上にその名を留めている遣唐使随行留学生は26名、留学僧は92名であり、留学僧の方が一般留学生の三倍半にも上がる。これは一つにはわが仏教界の唐仏教から学び取ろうという意欲が極めて旺盛だったことを示すが、1面にはまた僧侶の方が一般留学生よりも留学費が少なく済んだ事情もある。彼等の在唐中の生活は唐の人たちの布施によって支えることができたのである。留学生の多くは帰朝の有無もまた年代もわかっ

ていない。史上に痕跡をとどめているものは少ない。これは留学生たちの頭脳こそ秀でていたが、その家柄が低かったことによる。帰朝してのち遣唐使たちのように、その家柄を背景として高位高官にのぼり、経論を行なう地位にたてなかつたからである。橘逸勢、吉備真備などほんの一部を除いて、一般に留学生は社会的地位には恵まれなかつたけれども、彼等こそ学術専門家・技術専門家であり、芸術家であつて、それぞれの分野において留学によって得た新知識を発揮して文化の向上に貢献したことは論を俟たない。

留学生で消息のわかっているのは30人にすぎない。彼らの留学期間は平均約11年である。毎回十数人から二十名前後にのぼる留学生を留学させ、しかも相当長期にわたるものも多かったから、これに要する留学費も相当多額に上つた。留学生は日本から携えていった物を唐の市場で売って必需品を購入したが、特に砂金が携帯に便利なので、これを秤量貨幣として使用した。留学生たちは入唐に当たって朝廷より留学費を支給された。第17次遣唐使の留学僧円載とその従僧仁好・兼従始満が楚州で使節一行と別れて天台山に向かうとした際、大使藤原常嗣は学問料として帖綿10畳・長綿65屯・砂金25大両を支給し、送別の宴の後、大使はさらに涙を流して別れを惜しみ、別に若干の砂金を餞別に送っているのである。こうして本国から入唐に際し、留学費を支給された上、なお留学中も唐朝からも若干の支給があつた。たとえば第9次遣唐使に随つて入唐した留学僧栄叡・普照・玄朗・玄法等は唐朝から毎年絹25疋、四季の服が支給され、円載は5年間食料を支給されている。しかし以上のような留学費だけでは、長期間の留学を支えるには困難であつたから留学生たちは好便に託したり、あるいは従僧などを帰朝させて、留学費を朝廷に申請することがあつた。

以上のように留学生に対する留学費は相当多額に上つたのである。遣唐使に要する一切

の費用を総計したら、当時の財政としては莫大なものになる。遣唐使が任命されてから出発するまで2～3年の年月を費やしているのは恐らくその準備が容易でなかったからであろう。ことに遣唐使の在唐中の使用貨幣となる砂金の準備は簡単ではなかっただろう。遣唐使の派遣が前期の頃は約7年半に1回、中期は12年に1回、後期は20年に1回の割りというように時代が下るほど間遠になっているのも、結局その派遣費が国庫の大きな負担となってきたためであろう。

唐をめぐる諸外国が競って唐朝へ使節を派遣したのは朝貢貿易によって得られる莫大な利益に着眼してのことであった。しかし、文化的に後進国であった諸外国が唐の文化をも輸入しようという意図があったことも事実である。837年諸外国から集まった留学生は216人の多数に上っている。

遣唐使は帰朝に当っては唐の色々な物貨を購入した。特に書物を購入して帰朝する場合が多かった。勿論留学僧たちも単に教学の輸入ばかりにとどまらず、多くの書籍・仏像・仏画・仏具等を購入した。ことに在唐期間の短い場合、入唐して中国語を習ってそれから研究に入るには時間的余裕がなかったので通訳を伴って入唐している場合もある。じっくり腰をすえて読書三昧に耽るという余裕もなかったので、書物を書写して持ち帰るという方針をとっている。たとえば空海は十余人に依頼して両部大曼荼羅十鋪を模写させ、二十数名を集めて金剛頂等の密部の經典を書写させている。こうして空海は書籍だけでも何と905巻を持ち帰っている。わずか1年2ヶ月の留学で東寺や高野山を開き真言宗をひろめて弘法大師と称されたのも、彼のすぐれた天分のほかに、唐の文化の本質を見抜く鋭い洞察力を持っていたためである。持ち帰った書物を神護寺に運び、そこに籠って勉強することができたおかげである。このように留学生を含めて遣唐使たちが唐から持ち帰った經典の

目録をみると驚くほど膨大な量である。それこそ千国船いっぱいほどの經典・仏像・仏具・仏画など持ち帰っている。新たに遣唐使を送ってもあらかた買物をすませたので、もう持ち帰るものがなくなったので遣唐使を中止にしたという説があるくらいである。

いかに天才でも唐の進んだ膨大な知識をすべて身につけて帰ることなど不可能に近い。このため留学生たちは想像を絶する努力・苦悩を強いられる。空海や最澄などは留学期間が短かったため、逆に幸運であったとしかいいようがない。井上靖氏は第9次遣唐使(733年)の留学僧(業行、普照、玄朗、栄叡)の苦しみ、悲運の生活を「天平の薨」で実生き生きと再現しておられる。

「自分で勉強しようと思って何年か潰してしまっただけが失敗でした。自分がいくら勉強してもたいしたことはないと早く判ればよかったです。それが遅かった。經典でも経疏でもいま日本で一番必要なのは一字の間違ひもなく写されたものだ。」とさとした留学僧業行は異国で三十余年かかって、こつこつと一字一字おろそかにせず膨大な経巻を写し取った。血のにじむような長い長い努力がようやく認められ、鑑真が渡日する一行の船で帰る日が来た。このとき業行は54才であったが、身体はすっかり小さくなり、背は曲がり、視力は衰え、その姿は見る影もなくなっていた。山と積まれた經典は独りの人間の生涯から全く人間らしい生活を取り上げることによって生み出されたものである。「私の写したあの經典は日本の土を踏むと、自分で歩きますよ。私を棄ててどんどん方々へ歩いていきますよ。多勢の僧侶があれを読み、あれを写し、あれを学ぶ。仏陀の心が、仏陀の教えが正しく広まっていく。仏殿は建てられ、あらゆる行事は盛んになる。寺々の莊嚴は様式を変えて行く。」と業行は目をかがやかせた。ところが、日本を間近にして暴風雨に見舞われ、彼の大切な巻物は一巻ずつ、あ

上新請來經著目錄表

入唐學法沙門空叅言空菴以去延  
曆廿三年銜 命留學之末同津  
萬里之外其年臘月得到長安廿四  
年二月十日准勅配住西明寺爰則  
周遊諸寺訪擇師依幸遇青龍寺灌  
頂阿闍梨法號惠果和尚以為師主其  
大德則大興善寺大德智不空三藏  
之付法弟子也弋鈞經律談通密藏  
法之綱紀國之所師大師尚佛法之流  
布歟士民之可拔授我以發菩提心  
戒許我以灌頂道場法受明灌頂  
并三馬受阿闍梨位一度也肘行膝步  
鑿未攀攀首接足聞不聞幸賴國  
宗之大造 大師之慈悲學兩部之  
大法習諸尊之瑜伽斯法也則諸  
佛之肝心成佛之徑路於國城擲於  
人膏腴是故薄命不聞名重垢不純  
入印度則輸婆三藏既躋負宸振

弘法大師請來目錄 東寺(京都)藏

とからあとから身震いでもするかのような感じで潮の中に落下して行き、碧の藻のゆらめいている海底へと消えて行った。その短い間隔を置いて一巻一巻海底へと沈んで行く様は、いつ果てるともなき無限の印象であった。業行はもう決して取り帰すことのできない喪失感におそわれた。それは業行の悲痛な絶叫であった。千年も遠い昔、日本文化の進歩のため、遠い異国に出かけ全身全霊をかけて一生を捧げた業行の生き方は、その努力が報われなかったがゆえに、歴史に名をとどめることのない私達普通の人間に対して、歴史というものの本当の深さを教えてくれる。

玄朗は留学僧として唐土を踏み、入唐当初何年かは学んだが、性格の弱さか、それとも

自分の能力に自信をなくしたのか、学問をあきらめ、唐人の女性と結婚し、二人の子供をもうけていた。彼は第10次遣唐使船で普照が日本に帰ることを耳にして普照を訪ねた。若い頃の眼鼻立ちの整った玄朗の面影はなかった。服装も僧衣ではなく頭髪も伸ばしており、どことなく孤独な影を身につけていた。玄朗が訪ねた用件は妻子を同伴して日本に帰りたいが、何かいい方便はないものかということであった。「自分は留学僧として唐土を踏んだが、20年間に何一つ身につけなかった。入唐当初学んだものも、いまはすっかり忘れてしまった。僅かに持っているものは皮膚の色も顔立ちも異なっている妻と二人の子供だけである。金でもあれば将来品の一つや二つは購

えるかも知れないが、金も持っていない。しかし、どうしても故国には帰りたい。自分の生まれ育った国を、妻と二人の子供にも見せてやりたい。」そんなことを玄朗は暗い表情で語った。一方で、たとえ留学生活中、身を持ち崩しても、身一つであれば帰国してから何とでも言訳が立つが、妻子同伴の帰国となると、たとえ帰国を許されても、帰国後の世間の批判の眼は相当厳しいものと見なければならぬと思うのだった。結局は彼は出帆の日には顔をみせなかった。この地にとどまざるを得ないと判断したのだろう。玄朗の生き方は、留学僧としての立場からみると、勿論いろいろ批判すべきものを持っているが、しかし一個の人間としてみると、難すべき点はないように思える。

栄叡と普照は入唐して9年目になって、日本に戒法を伝える師として第一級の高僧の渡日の計画を本格的に企てたのである。しかし唐の国法では、私人の出国は許されない。唐の僧侶を日本へ送ることは国法に違反する行為なのだ。彼らは長安、洛陽と回り歩いたが、すぐれた師に会うことができなかった。ところが、とうとう揚州の大明寺で、すぐれた授戒の大師鑑真に出会う。鑑真は四万人以上もいる弟子のなかから日本へ行く希望者を募ったが一人もいない。ついに鑑真は海東の小国に行く決心をする。しかし渡航の準備中、高麗僧如海が密告し栄叡と普照は投獄されるが、宰相李林甫によって4ヶ月後に釈放されている。これが第1回の失敗である(742年)。第2回渡航は悪風に遭い船が難破し、ずぶ濡れになって岸に辿り着くという始末であった(743年12月)。第3回の渡航にとりかかったが、大唐の国宝である鑑真を海東の小国に連れ去られることを心配し、鑑真をたぶらかしているのが日本人僧であると州官に密告するものがあった。栄叡は枷をつけられ、鎖につながれて、抗州まで行ったところで病気になった。そしてとうとう死んでしまった。じつは

死んでいないが、死んだことにしてもらって自由の身となった。このような事件のために3回目の渡航計画も失敗である。4回目の渡航直前に鑑真の高弟、靈祐が彼の保護を官辺に願い出た。我が大師和上、願を發して、日本国に向かわんとし、山に登り、海を渉りて数年艱苦す。死生を測る莫なし、共に官を告げて遮り留せしむ可し。という結論に達したからである。ひたすら鑑真の身の上を案じてのことだが、結果は鑑真の意に反してかれにこの上もない精神的苦痛を与えたのだった。愛弟子の保護願いのため第4回の渡航計画も失敗に終わった(744年)。これから4年たって、栄叡と普照は再び鑑真を訪ね、第5回の渡航を乞うた。ただちに準備を整え出帆した外海へ進むにつれて、強風が吹き出し、鑑真一行の漂流がはじまる。舟上に水無し。米をかめば、のど乾きて咽ども入らず、吐けども出でず、かん水を飲めば腹即ち脹らむ。一生の辛苦、何ぞこれより劇しからんや。という状態であった。漂流すること14日やっと陸にたどり着いた。海南島の南端である。第5次渡航計画も失敗したのである(748年)。5次にわたる苦難の渡航は、すべて栄叡と普照の情熱に、鑑真が意気を感じて決行させたのだ。ところが、日本渡航の望みを果たさず、壮途半ばで、栄叡が死んだのである。栄叡の無念さは察してあまりある。男の涙を禁じ得ない。栄叡の人間としてのレベルが如何に高いものであったかは、彼の死によって鑑真がこれまでに倍する苦難が前途に待ちうけていても、必ず渡航を果たさねばならないと決心したことからも伺い知ることができる。このころから鑑真は眼を病み、ついに失明するのである。

日本政府は17年ぶりに遣唐使を派遣することに決めた(750年)。大使は藤原清河で、出発は752年であった。753年、日本僧普照のいた明州に上陸した。この遣唐使節に普照が会って鑑真のことを語り正式招聘を懇願したのは当然であろう。5回の渡航失敗の話しなど、

大使の胸を強くうったにちがいない。勿論、密航であったので、第1船の大使の船に乗せるのを憚った。鑑真の乗った第2船は薩摩の坊の津に着いた。このとき鑑真66才、753年のことであった。第1船は座礁し、ベトナムまで流れていた。もし正式招聘であったら、鑑真は第1船に乗せられたはずである。第六次になって渡航はやっと成功した。第1次渡航を計画して実に10年がたっていた。

鑑真が寂したのは、唐招提寺ができてから4年目天平宝字7年(763年)の夏であった。年76才。翌年、朝廷は使を揚州の諸寺に派した。揚州ではどこの寺でも僧たちは喪服をつけ、3日間東に向かって哀悼の意を表した。日中文化交流の淵源とでもいうべき鑑真は日本にみづみづの文物をもたらした。だがそのような物質面での交流よりも鑑真が渡航で身をもって示した「不惜身命」の勇気のほうが、はるかに価値があるだろう。栄叡と普照が身心を賭して、1級の人物を外国から招聘したことは日本の歴史においてもっと大きな意義があったように思われる。明治初期において文明の教師として外国人を招いたが、その時、つねに第1級の人物を選ぶことを心がけたのは、この時の栄叡と普照の心意気が、日本人の心に深く刻み込まれていた為ではなかろうか。

遣隋使、遣唐使は、風まかせの航海で、常に難破の危険にさらされ、命がけであったことは上に述べた通りである。その後、遣欧使節(1613年)、薩摩藩英国留学生(1865年)など多くの留学生が危険をおかし想像を絶する辛苦に耐えて、知識のため、学問のため外国に出かけていった。幸いに目的地についたとしても、不自由な言語や全く一変した生活環境のため、どれほどの困難に出会わねばならなかったかは想像にあまりある。それが多くの悲劇や挫折を生んだ。彼らの多くは捨て石として歴史の底ふかく埋もれてしまっている。しかし彼らが日本の文化の発展に大きく寄与

したことはいうまでもない。

ともあれ、留学はかつて超エリートだけに与えられた特権であった。しかし遣唐使から千年あまりの歳月が流れた今、留学コンサルタント業者が店開きした頃(1971年)から、資金さえあれば誰でも留学できるようになった。いわば猫も杓子も留学する時代を迎えたのである。猫の一匹として筆者も、かつてアメリカの大学で1年学んだ。研究にゆきづまった時、語学の障害を感じた時、如何ともしがたい民族の違いを思い知らされた時、強い孤独感、焦燥感に襲われ、しばしば望郷の念にかられた。気楽な立場での留学であったにもかかわらず、筆者には心身をけずる思いの1年であった。それゆえに、遣唐留学生の想像を絶する辛苦に耐えた強靱な精神力・血を吐くような努力・旺盛な知識欲・人間としての視点の高さにはただただ敬服するばかりである。

#### 参考文献

- 1) 森 克己「遣唐使」至文堂(1966年)
- 2) 佐伯 有清「最後の遣唐使」講談社(1978年)
- 3) 井上 靖「天平の甕」改訂版、中央公論(1975年)
- 4) 陳 舜臣「人物日本の歴史」第2巻、小学館(1975年)